

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答の際には、句読点やカギカッコなどの符号も字数にふくむものとします。

少年は、I 隣を見た。女の子も少年に遠慮がちに目をやって、「どっちから言う？」と訊いてきた。想像していたより細くて、高くて、優しそうな声だった。

「……そっちからでいいよ」

少年の声は緊張でうわずってしまった。

女の子は「あ、そう」と軽く応え、II、まるで最初から決めていたように日付と時刻を口にした。

「十二月十九日の夜七時」

胸が、どきん、とした。

「なんで？」——思わず訊くと、女の子は逆にIIIした顔で少年を見て、それからクスツと笑った。

「誕生日。ちょうど七時ぐらいだったって、お母さんが言ってたから」

A 胸がさらに、どきん、どきん、とつづけて高鳴った。

「あの……俺も……そうなの」

「なにが？」

「十二月十九日……って、俺も誕生日」

「ほんと？」

「ほんとほんと、嘘じゃないって」

生まれた時刻はわからない。両親に聞いたことも、あるような、ないような。夜だった——と、思う。夜の七時頃だった——ことにした。

「すごい。偶然だね」

女の子はうれしそうに言った。

少年も「うん、びっくりした、俺も」と笑った。

二人そろって、それぞれの星座盤を回した。夏の夜空とはまったく違う空があらわれた。夏には南北に延びていた天の川が、冬には東西に横たわっている。こぐま座も、IV 逆立ちをしたように、北極星が一番南になった。夏には見えなかったうお座が空の真ん中にある。アンドロメダ座やカシオペア座も、だいたい南に下がっていた。

「……うわっ」

① さっきはなんにも感じなかったのに、いまは、宇宙や星のことを素直にすごいと思った。女の子も、星座盤をじっと見つめて、「わたしたちの誕生日って、こういう空だったんだね」と言った。

「わたしたち」が、いい。同じ日に同じ街で生まれて、V 出会うことなく同じ日にちを生きてきた「わたしたち」がいま巡り会えた、というのが、すごい、いい。

B 胸の高鳴りが、微妙に変わった。最初はただ驚いていただけだったが、いまは違う。女の子の名前を訊きたかった。自分の名前も知ってほしかった。胸の高鳴りが大きすぎる。息が苦しい。やっとの思いで声を絞り出した。

「……学校、どこ？」

「港小。そっちは？」

「俺……つつじヶ丘」

「つつじヶ丘って、どこだっけ。駅のこっち側？」

「うん、逆、駅の西口から山のほうに行ったところ」

「あ、じゃあ、市民会館の近く？」

「ちょっと遠いけど、図書館なら近所」

「図書館とか行ったりするの？」

「たまに。本は借りないけど、外で遊んでる」

(略)

女の子は、それ以上学校のことは訊いてこなかった。「じゃあ、今度はそっちが決めて。日にちとか時間とか」と言っていて、誕生日に合わせた星座盤を動かして星空の形を変えてしまった。

② 少年はがっかりして、頭をはたらかせる余裕もなく、とっさに浮かんだ日付と時刻を口にした。

一月一日午前〇時――。

「やだあ、テキトー」と女の子はおかしそうに笑って、人差し指で盤を回した。

星座盤の操作をしばらく練習したあと、宇宙のはじまりや星の生まれる仕組みを解説したビデオを観て、みんなでプラネタリウムに移動した。

プラネタリウムの席は決められていなかったが、みんな自然とさっきのグループごとに集まって座った。

少年も――先に座った女の子の隣の席に、どきどきしながら腰かけた。もしも嫌がられたり別の席に移られたりしたらど

うしよう、③ 死んじゃうかもしれない、死んだほうがいい、もう死んじゃおう、と本気で心配していたが、女の子は平気な顔をして、投影の始まる前のドーム型の天井を見つめたまま、言った。

「わたし……プラネタリウムが一番楽しみだったの。だから一人でも申し込んだの」

少年は、小さな声で、聞こえなくても――聞こえないほうがいいとも思っ、「俺も」と言った。

プザーが鳴って、天井が暗くなった。首を動かさなくても天井を眺められるように、椅子がゆっくりと後ろに傾いていく。女の子は「もうすぐ始まるね」とささやいた。少年も「うん……」と小さく応えた。会議室で隣り合っていたときよりも距離が近い。肘掛けに載せた腕が、女の子の腕と触れそうだった。

音楽とともに、星空が天井いっぱいに広がった。

「今年の旧暦による七夕は、八月十一日です。皆さんもご存じのように、織姫と彦星が年に一度だけ天の川を渡って出会う、という日です。織姫はこと座のベガ、彦星はわし座のアルタイルという名前の星で……」

ナレーションに従って、ベガとアルタイルがひときわ明るく瞬き、はくちよう座のデネブを合わせて、『夏の大三角形』が描き出された。

少年は女の子の様子をそっとうかがった。顔を向けることはできない。声もかけられない。気配だけを感じ取る。

来年の夏休みにも『子ども天文教室』は開かれる。六年生のクラスは、バスで天文台まで出かけて、一泊二日で天体望遠鏡を使った星空観察をするという。

来年も参加したら、また会えるだろうか。いまのうちに「来年も行く？」と訊いて、「俺は行くけど」と伝えて、約束とまではいなくても、とにかく来年の話を……そうすれば、ほんとうに、また会えるだろうか……。

片思いの子はいる。同じクラスのタナベさん。比べたらタナベさんのほうがずっとかわいいし、口喧嘩ばかりしていても、

けっこう⑤ 気が合うところもあるし、だいいちタナベさんとは毎日同じ教室で会えるのに。

浮気⑥ 浮気って、こういうこと？

俺⑦ 俺って、オンナたらしの、ヘンタイ？

急に恥⑧ 急に恥ずかしくなった。頬や耳たぶが熱くなった。

まいったな、まいったな、まいったな、と椅子に座ったまま腰をもぞもぞさせていたら、肘が、女の子の肘に触れた。思わずびっくりとして、肘掛けから腕を下ろして、⑨ 肩をきつくすぼめた。

女の子は体を動かさなかった。星空に夢中になっているのが気配でわかった。そつと横顔を盗み見ると、天井の星明りを映し込んだ女の子の目は、涙を浮かべたようにきらきら光っていた。

投影が終わって椅子の角度が元に戻り、天井の明かりが点くと、女の子は「じゃあね」と少年に一言かけて、さっさと席を立ち、外に出て行った。

④ お別れの名残惜しさは、少年の胸にだけ、あった。

プラネタリウムのロビーでは、先生が修了証と記念品の特製ステッカーを配っていた。女の子は一人でそれを受け取って、一人で帰っていく。追いかけたかったが、ステッカーをもらう行列は、もうだいぶ長くなっていた。天体望遠鏡の形をしたステッカーは——やっぱり、ほしい。

行列の後ろに並んだ。女の子はロビーから建物の外に出るところだった。

呼び止めて、駆け寄って、足を止めて振り向いた女の子に……想像だけは先へ進んでいくのに、声が出ない。

女の子の後ろ姿が、消えた。

少年の胸の高鳴りも、すうっとおさまった。

⑤ 泣きたいような、あははつと笑ってしまいたいような、胸やおなか、ふわふわしたクッションにそっくり置き換わってしまった気がする。

行列はあと十人ほど。修了証の名前と本人を確認するのに手間取って、なかなか先に進まない。

少年は手に持った星座盤を、そつと指で回した。

十二月十九日、午後七時——。

⑥ ベガとアルタイルは、天の川を挟んで、西の地平線の少し上に浮かんでいた。

(重松清 「プラネタリウム」——一部省略——による)

問一

I V

の中に入る言葉として適当なものを、次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア きよとんと イ ちらりと ウ くるつと エ すぐに オ ずっと

問二

……線①②の意味の説明として適当なものをそれぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

①「うわずってしまった」

ア 重心を大きく崩してしまった様子。
イ 情けない音を立ててしまった様子。
ウ 気持ちが高ぶって逆上してしまった様子。
エ そうぞうしくなってしまう様子。
オ 落ち着きがなくなってしまう様子。

②「気が合う」

ア 着ているものの格好やしぐさが気がきいて見えること。
イ いろいろな物事の考え方や感じ方が互いに通じること。
ウ 駄目になってしまってもすぐに修復できること。
エ ことあるごとに同じ発言や行動を同時に行うこと。
オ お互いのことを考えて、配慮が感じられること。

③「肩をきつくすばめた」

ア 両手で強く肩を包んだ様子。
イ 両方の肩をがっくりと落とした様子。
ウ 両方の肩を強くちぢめた様子。
エ 両方の肩を力をこめて引き上げた様子。
オ 手のひらを上に向けて両肩をすくめた様子。

問三 ――線①「さっきはなにも感じなかったのに、いまは、宇宙や星のことを素直にすごいと思った」とありますが、なぜ少年はすごいと思ったのですか。その理由として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女の子の誕生日が自分と一緒だと知り、とっさに生まれた時刻も同じだと嘘をついてしまったが、雄大な星空のもとで、いつそのことが白日の下にさらされるかとおびえていたから。

イ 席が隣になった気になる女の子と誕生日が一緒であることがわかり、女の子との関係から宇宙や星空への関心も深まり、女の子とさらに親しくなれることを期待したから。

ウ 隣に座った少し気になっていた女の子と誕生日が一緒であることがわかり、同じ誕生日の星座を観察できたことで、女の子との出会いを不思議なものと感じたから。

エ 誕生日が同じというだけで、気になる女の子との出会いを特別なのだとみなすことはありえないことで、宇宙や星々の単位からみれば、まったく意味がないことだと感じたから。

オ 同じ日に同じ街で生まれ、同じ日にちを生きてきた「わたしたち」が、やっと出会ったのは、偶然ではなく、星の導きによるものであり、奇跡はあるのだと確信したから。

問四 ――線A「胸がさらに、どきん、どきん、とつづけて高鳴った」、――線B「胸の高鳴りが、微妙に変わった」とありますが、少年の気持ちはどのように変化しましたか。それぞれの「胸の高鳴り」の違いを考えて、解答欄の形に合わせて説明しなさい。

問五 ――線②「少年はがっかりして」とありますが、なぜ少年は「がっかり」したのですか。その理由を六十字程度で説明しなさい。

問六 ――線③「死んじゃうかもしれない、死んだほうがいい、もう死んじゃおう」とありますが、少年がこのように思ったのはなぜですか。その理由として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子ども天文教室で知り合ったばかりの女の子は自分に好意があると思っていたのに、もし同席することを断られたら、女の子は自分をうらぎったことになるので、彼女に対するにくしみでふつうでいられなくなるから。

イ 女の子とは、来年の子ども天文教室でも、アルタイルとベガのように会おうと約束したのに、同じ席に座れなくなってしまうたら、その約束が果たせなくなり、とても悲しい思いをするから。

ウ 子ども天文教室で知り合ったばかりの女の子とは誕生日が同じことから特別な思いを抱いていたのに、その彼女がもし自分と同じ席に座ることを断ったら、はずかしさのあまりいたたまれなくなるから。

エ 子ども天文教室で出会った女の子とは誕生日が同じことから不思議な縁を感じていたのに、同席を断られたら、自分の勝手な思い込みが周囲の人たちの知るところとなり、いかりのやり場がなくなるから。

オ 女の子とは来年の子ども天文教室でも会いたいと思っていたが、なかなかその話を彼女に切り出せず、もし同じ席に座れなくなってしまうたら、自分の責任だと思い、女の子に迷惑をかけないようにと考えたから。

問七 ――線④「お別れの名残惜しさは、少年の胸にだけ、あった」とありますが、このような状況を表す表現として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 能天気 イ 自分勝手 ウ 一人相撲 エ 無邪気 オ 孤立無援

問八 ――線⑤「泣きたいような、あははと笑ってしまいたいような、胸やおなが、ふわふわしたクッションにそっくり置き換わってしまった気がする」とありますが、このときの少年の心情はどのようなものだったと考えられますか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女の子に対する期待や緊張から解放された脱力感。
イ 女の子との今後の関係をさんざん悩んだ末の高揚感。
ウ 好きでもない女の子に嫌われまいとする緊張感。
エ 初めて女の子と二人で過ごすことができた達成感。
オ 女の子と話を合わせなければならなかった疲労感。

問九 ――線⑥「ベガとアルタイルは、天の川を挟んで、西の地平線の少し上に浮かんでいた」とありますが、少年と女の子とのその後は、どのようなになるでしょうか。この最後の文章と本文をふまえてその後の二人の関係を想像した場合、いくつかの未来像が考えられます。その妥当な未来像として適当なものを後のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア こと座のベガとわし座のアルタイルはお互いに心を寄せる織姫と彦星のことであるので、織姫は少年が片思いを

しているタナベさんにふさわしいため、結局少年は女の子のことにすぐに忘れていってしまうだろう。

イ ベガとアルタイルにはもともと距離があり、一人でも自分の好きなことを求める精神的な強さを持っている女の子は、少年の幼さにあきれているので、町で会ったとしてもそのまま互いにすれちがってしまうだろう。

ウ 星座盤に星が浮かび上がり、プラネタリウムがきっかけとなって二人が知り合ったことから、来年は、女の子と一緒に天体望遠鏡を使って、デネブとアルタイルとベガで構成される夏の大三角形を観察しているだろう。

エ 星がやがて沈んでいく西の地平線に浮かんでいることや女の子が足早に去って行ってしまったことから、少年の心に女の子への思いは残るにしても、結局は出会えないまま、二人の関係はここで終わってしまうだろう。

オ 天の川を隔てて輝く星たちのように、距離の離れた少年の思いに少女はとまどいを感じながらも、自分のことを気にかけてくれたことがうれしいので、女の子は織姫と彦星のように年に一度の出会いを心待ちにしているだろう。か こと座のベガとわし座のアルタイルが星座盤に浮かび上がったことから、互いに心を通わせ、年に一度の出会いが許される織姫と彦星のように、少年と女の子も来年の天文教室で再会し、互いに思いを寄せるようになるだろう。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答の際には、句読点やカギカッコなどの符号も字数にふくむものとします。

人間の脳は、過去の出来事^{できごと}だけではなく、過去に得た知識をも、きれいさっぱり忘れてしまうようにできている。ものを忘れる能力、これはコンピューターやロボットにはない人間の長所、あるいは短所といえるだろう。

忘却^{わうきやく}という人間特有のこの能力が、長所となって現れる場合はずいぶんある。例えば、日常生活を営んでいく上で何ら支障^{ししょう}をきたさない瑣末^{さまつ}なことが記憶^{きおく}から去らなかつたり、いやな出来事、腹立たしいことなどが忘れられなかつたら、人はまず確実に神経衰弱^{しんけいすいじやく}に陥^{おちい}り、悪くしたらその方面の病院で一生を送らなければならなくなる。してみれば、ものを忘れることができるという人間の能力は、この点ではまことに尊い能力だといえるわけである。

では、この能力が短所となって現れる場合は、どうだろうか。

[B]

大学で学んだことを、めでたく就職^Iすると忘れたり、あるいは国家試験

に向けて汗水流^{あせみ}して覚え込んだ知識を、ライセンスを取得するとどこかへやってしまう。このようなことは、[X]、人間の忘れる能力が短所となって現れる例といえそうである。

そこで問題は、勉強してもどうせ忘れてしまうものをなぜ苦勞して勉強しなければならないか、ということになる。

私は、学生からこうたずねられると、「それは知恵^{ちえ}を身につけるためではないか」と答えることにしているのだ。つまり、学ぶことの中には知恵という、目に見えないが生きていく上に非常に大切なものがつくられていくと思うのである。この知恵がつくられる限り、学んだことを忘れることは人間の[Y]とならない。学ぶことは、結果として無駄^{むだ}にはならないのだ。だから大いに学び、大いに忘れ、また学びなさい、と私は答えることにしている。

[C]

、いったい「知恵」とは何だろうか。それはきわめてあいまいなもので容易^{やす}に分析^{ぶんせき}し難^{がた}いものだが、ただし、人間の中のどこにそれがつくられるかは、はっきりしている。

脳である。してみれば、知恵は人間の脳の仕組みと何らかの関係をもつものではないか、こんな推論^{すいろん}ができそうな気がする。

①人間の脳の特性を明らかにするには、猿^{さる}などの動物のそれと比べるより、やはり脳をもった機械、コンピューターやロボットと比較^{ひかく}するのが、一番てつとり早いと思う。

まず私は、ものを忘れることはコンピューターやロボットなどにはない人間特有の能力だ、と前に述べた。[D]、実はそれは正確^{せうさく}な方^{かた}ではないのである。人間の脳には百四十億^{さくしう}の細胞^{さいぼう}があつて、出来事や知識を無数^{むすう}に蓄積^{ちくせき}できるようになつてゐるし、事実、蓄積^{ちくせき}されているのだ。ただコンピューターは記憶^{きおく}したことを自由自在に百パーセント取り出すことができるのに対して、人間の脳は、記憶^{きおく}したことをほんのわずかしかり出すことができない、という相違^{さうい}にすぎない。とも

あれ、脳に無数の情報を蓄積^{ちくせき}しているのは厳然^{げんぜん}とした事実なのである。つまり人間は「忘れる」のではなく、「脳に蓄積^{ちくせき}し取り出せない状態にする」能力をもつといったほうが正確な表現といえる。

私はこれを、コンピューターなどにはない、人間の脳のみが有する②「ゆとり」だと思う。私がこの場合に使った「ゆと

り」は数学的な意味での「ゆとり」である。すなわち、わずかしかない「いつでもすぐ取り出せる」情報に對比して、実は膨大^{ぼうだい}な量の情報が「すぐ取り出せない」形で脳に蓄積^{ちくせき}されているという、後者の前者に対する比率の大きさを「ゆとり」ということにしている。

人間の脳にあるこの「ゆとり」が、実は知恵というものをつくる要素の一つなのだ。

脳に蓄積^{ちくせき}され取り出せない状態にされていた知識は、永遠に取り出せないものではなく、ちよつとした手間ときつかけを

つくれば、容易に取り出すことができるのだ。人間の脳に「ゆとり」があるからこそ、それが可能なのである。

知恵とは、一つはこのような側面をもったものだと思う。私はこれを「知恵の広さ」と呼ぶことにしている。この「知恵の広さ」は勉強しては忘れ、また勉強しては忘れていくうちに、自然と脳の中につちかわれていくのである。

知恵がつけられる場所である人間の脳は、また、コンピューターなどと違って、物事を幅をもってみつめ、考えることができるようにできている。つまり寛容な思考態度をとることが人間にはできるのだ。

例えば、コンピューターに映画を見させても、^③彼は鑑賞することができない。なぜなら、一つ一つのコマがバラバラな画面に見え、そこにある連続した動きがコンピューターには見えないからだ。ところが人間は、一つのコマを見てイメージをはっきり残し、次のコマへ移るまでのきわめて短い間を無視し、^②前のコマのイメージを持続させて次のコマのイメージと重ねることができる。これは人間の脳がある時は敏感に働き、ある時は鈍感に働き、また刺激に対する反応の余韻を残すという特性をもっているからだ、ともかくも、人間はそのような不連続なものから連続したものを読みとる能力をもっているのだ。

人間の脳にあるこの寛容性は、ものを考える上でも発揮される。その一つは^④連想である。

文章、特に詩とか格言のようなものを読む時、その中の言葉から連想される異なった言葉を、思いつくまま列記しておくとする。列記された言葉のいくつかを組み合わせ、新しい文章をつくってみる。こうしたあとで、もう一度、元の文章を読み直すと、意味の理解が深みと新鮮さをもつのだ。連想は、言葉の意味と感じに幅をもたせてみるという脳の寛容性から生まれる。人がものを考える時は幅をもった考え方をするものであり、またそれでこそ、思考は発展性をもって深まってくるのだ。

私は、人生には深くものを考えなければならない時期があり、その深い思考力をつちかうことも勉強の目的の一つだ、と

前にいった。これはいいかえれば、勉強してこそつくられる「知恵の深さ」である。勉強しない人の脳は、人間特有の幅をもった思考のレッスンをしないから深くものを考える力、つまり「知恵の深さ」が身につかないのだ。

知恵には「広さ」があり、「深さ」があり、また「強さ」というものがある。「知恵の強さ」とは、すなわち決断力である。私たちが人生で当面する問題には、クイズやテストのようにあらかじめ答えが用意されているものはない。クイズの問題は解答を見つけるだけの問題だが、人生の問題は、相当の時間をかけなければ問題そのものの真意もつかめないし、到底真の解決に至らない。^③難問ばかりである。だから、長い年月をかけて、すべてを知らなければ何の行動も起こせないという姿勢にだけ固執しては、この世は渡つていけない。

医者が、現在の医学の水準ではある病気について数パーセントしか解明されていなくても、目の前で苦しんでいる患者に何らかの診断をくださなければならぬ時があるように、それがいかに未解決の難問であろうと、どこかで決断しなければならないのである。飛躍しなければならぬのである。

人間の脳は、不連続のものから連続したものを導き出す寛容性をもっている、と私はいった。いいかえれば、^⑤実は飛躍であることを飛躍でないととらえられるのが、人間の脳である。だから、人間は飛躍ができる。コンピューターやロボットには、それができない。

決断できる力、どこかでエイッと飛躍できる力。知恵のそういう「強さ」も、人生とは直接かわらないように見える勉強を積み上げていく中で、身につけていくものののだ。

知恵には、以上私が述べたほかにいくつかの側面があるはずだ。いずれにせよ私は、^⑥「人はなぜ学ばなければならないか」の答えがあるとすれば、「それは知恵を身につけるためだ」と、答えるほかないのである。

③ 瑣末……重要でない、小さなことであるさま。
ライセンス……免許・許可証のこと。

問一 — 線①「A」に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ア では イ だが ウ 例えば エ また

問二 — 線Ⅰ～Ⅲの語について、二つの漢字の関係が同じ熟語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ア 美德 イ 風雨 ウ 国営 エ 乗車 オ 不快

問三 — 線①「X」・線②「Y」に入る語句として適当なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。
X ア 一向 イ 一律 ウ 一度 エ 一見 オ 一日
Y ア 非 イ 得 ウ 未 エ 罪 オ 道

問四 — 線①「人間の脳の特性」とありますが、その「特性」とは何ですか。それが記されている二十五字以上三十字以内の部分を本文中より探し、最初と最後の四字をそれぞれぬき出して答えなさい。

問五 — 線②「『ゆとり』」とありますが、それは何ですか。本文中の語句を用いて六十五字以内で記しなさい。

問六 — 線③「彼は鑑賞することができない」とありますが、それは何が欠けているからですか。——線③よりも後の本文中より一語でぬき出して答えなさい。

問七 — 線④「連想」とありますが、それは「言葉」においてはどのような働きをするものですか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一つの言葉から連想される様々な考え方がその言葉のもつ新たな意味を明らかにすることで、元の言葉が意味の新鮮さを取りもどす。

イ 一つの言葉から連想される別の格言の存在に気付くことで、いくつもの格言が重なり合って一つの格言に歴史的な重みを与える。

ウ 一つの言葉から連想される異なった言葉を思いつくままに列記しておくことによって、元の言葉が持たえない意味の新鮮さをもたらす。

エ 一つの言葉から連想される様々な詩の背景を心の中で自分なりにイメージすることで、人間の脳に新たな世界の広さを生じさせる。

オ 一つの言葉から連想される異なった言葉とそれらの新たな組み合わせから生じる言葉の幅によって、元の言葉の理解に深みをもたらす。

問八——線⑤「実は飛躍であることを飛躍でないととらえられる」とありますが、それはどういうことを言っているのですか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間の脳の性質によって、関係性をもたないものでも、本来的に関係性があるものと考えて、つながりをもたせることができるということ。

イ「知恵の広さ」を身につけることによって、幅広く物事を考え、飛躍という現象を常に否定的にとらえることができるということ。

ウ「知恵の深さ」を身につけることによって、二つの事象の関係性を深くみつめ、冷静な判断力によって、つながりをもたせることができるということ。

エ「知恵の強さ」を身につけることによって、まったく関係のない物事同士を、強引に結びつけることが可能になるということ。

オ 人間の脳に「ゆとり」があることによって、関係性をもたないものでも、記憶した情報を自由自在に取り出すことによってつながれるということ。

問九——線⑥「『人はなぜ学ばなければならないか』とありますが、その答えを六十五字以内で記しなさい。

三

次の①～⑩の——線部の片仮名を漢字に直しなさい。漢字はバランスを整えて、ていねいに記すこと。

- ① 私はこの町にアイチャクがある。
- ② 友達が旅行に行っている間、彼が飼っている犬をアズかる。
- ③ 犯罪にカタンしてはならない。
- ④ エンカイ区域でアサリをとる。
- ⑤ 見知らぬ人の親切にオンギを感じる。
- ⑥ 尊敬する剣道の先生にシジして練習にはげむ。
- ⑦ 友人のK君は私の大切なアイボウだ。
- ⑧ むだな出費をハブく。
- ⑨ オリンピックのセイカ台。
- ⑩ 熱湯でシヨウドクする。

国語 解答用紙

受験番号

氏名

得点
点

一

問一 I	問二 X
II	Y
III	Z
IV	問三
V	

問四 Aでは	問四 Bでは
による胸の高鳴りを感じていたが、 による胸の高鳴りへと変化した。	

問五	問六
	問七
	問八
	問九

二

問一 A	問二 I	問三 X
B	II	Y
C	III	
D		

問五

問六
問七
問八

問九

三

①	⑥
②	⑦
かる	
③	⑧
	く
④	⑨
⑤	⑩